

指導資料



鹿児島県総合教育センター

生活 第8号

- 幼稚園，小学校，盲・聾・養護学校対象 -

平成18年5月発行

生活科における「確かな学力」を育てる学習指導の充実

学習指導要領は，児童に基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ，「生きる力」をはぐくむことをねらいとしている。

その「生きる力」の知の側面である「確かな学力」は，学ぶ意欲と思考力・判断力・表現力，知識・技能などが，学習の過程で相互に深くかかわり，高め合いながら確実に定着していくものである。

生活科においても，身近な環境や自分についての気付きや，活動などに関する思考・表現，生活への関心・意欲・態度などの「確かな学力」を育成することが求められている。つまり，学習指導要領に示された生活科の基礎的・基本的な内容を，確実に定着させる「分かる授業」を一層充実させることが不可欠なのである。

さて，生活科における「分かる授業」とは，児童が対象と直接かかわる中で，気付いたことを自ら表現しながら実感し，認識していくことであり，自分と人や社会，自然とのかかわり，自分自身に関する新たな気付きなどをとらえることのできる授業のことである。そして，教師が児童の気付きのもつ意義や価値を明確にし，気付きの価値付けをして児童に返すことのできる授業のことである。

これまでの生活科の授業を振り返ると，各学校において地域の特色を生かした年間指導計画等が作成され，児童の思いや願いを大切にしようとする実践がなされてきている。

しかし，中には学習指導要領の生活科の改訂の趣旨にもあるように，活動することが目的になってしまい，「確かな学力」を育成するという意識が充分ではないといった指摘もある。

そこで，本稿では「分かる授業」を行い，生活科における「確かな学力」を育てるために創意工夫した学習指導の充実について述べる。

1 生活科の学習で目指す学力

生活科の学習で目指す学力は，生活科の内容や目標を踏まえた評価の観点や趣旨として，次のように整理されている。

観 点	趣 旨
生活への関心・意欲・態度	身近な環境や自分自身に関心をもち，進んでそれらとのかかわり，楽しく学習や生活をしようとする。
活動や体験についての思考・表現	具体的な活動や体験について，自分なりに考えたり，工夫したりして，それをすなおに表現する。
身近な環境や自分についての気付き	具体的な活動や体験をしながら，自分と身近な人，社会，自然とのかかわり及び自分自身のよさなどに気付いている。

このような生活科の学習で目指す学力を定着させるために、教師は児童のもつよさと可能性を信じ、児童が自ら活動できる授業にすることが大切である。

2 「確かな学力」を育てる視点

「確かな学力」を育てるために、これまでの生活科の学習指導を、次の視点で見直してみることが必要である。

(1) 具体的な活動や体験の充実

具体的な活動や体験を充実するとは、児童が体全体で、身近な環境（人や社会、自然）に対して五感を駆使し、直接働き掛けることである。そして、感動体験や繰り返し体験などから楽しさを得るとともに、そこで気付いたことなどを、言葉、絵、動作、劇化など様々な方法で表現できるようにすることである。

(2) 自分とのかかわりに関心をもって学ぶことの充実

児童が自分とのかかわりに関心をもって学ぶとは、身近な環境（人や社会、自然）が自分にとって価値があると気付き、身の回りにあるものをもう一度見直し、切実な問題意識をもって新たな働き掛けをしたいという思いや願いをもつことである。そして、その思いや願いを基に、身近な環境に働き掛けをしたり、表現したりすることである。

3 創意工夫した学習指導

生活科の目指す学力を確かなものにするために、先の視点で A 小学校第 2 学年生活

科の学習指導実践例を紹介する。

単元「みんなでつくろうフェスティバル」は、「自分のよさを生かし、主体的に人とかわることができる児童の育成」を目指し、幼児との交流を行った 2 学期の実践である。

(1) 指導計画の工夫

ア 単元指導計画の見直し

これまで単独に実施していた「お祭り」と「幼児との交流活動」を組み合わせ、単元「みんなでつくろうフェスティバル」が構成された。

生活科は 2 年間で八つの内容を扱うことになっているが、単元の構成については内容の連続性や関連性を考慮したり、繰り返して内容を取り上げたりするなど、児童の体験を広げたり、深めたりすることができる指導計画を、評価計画まで入れて作成するようにしたい。

この単元指導計画では、児童が幼児とのかかわりを深めることができるように、交流活動を 4 回設定し、評価の観点と評価方法も示している。また、幼児とのかかわりについて、児童の気付きを自覚させる手だてとして、3 回目の交流活動は幼児にお祭りの店を紹介するという形で表現活動を設定している。（図 1 参照）

イ 2 年間を見通した指導計画の作成

主体的に人とかわかることのできる児童を育てることを目指して、幼児との交流だけでなく、高齢者との交流を設定した第 1 学年単元「ふゆとあそぼ

う」や、地域の人々との交流を設定した第2学年単元「わあい、おいもだ」を作成している。

これらの単元において、高齢者や地域の人々、幼児等の多様な人々との

かかわりがもてるように、内容の連続性や関連性を考慮して、2年間を見通した指導計画を作成している（図2参照）。

過程	時	主な学習活動・児童の意識	教師の支援 □ 確かな学力（幼児とのかかわりの評価項目）
か か わ る 人 と 出 会 う	1	1 お祭りについて話し合おう。 ・ 僕もあのお祭りに行ったことがあるよ。 ・ お祭りには地域の人々の願いが込められているんだね。 ・ お祭りには出店がたくさんあるし、花火が上がったりもするよ。 ・ お客さんがたくさんいるね。 ・ 幼稚園のお友達と一緒にお祭りに行けるなんて楽しみだなあ。	○ 教師の支援 □ 確かな学力（幼児とのかかわりの評価項目） お祭りの様子を撮影したビデオを見せることによって、お祭りへの関心を高める。 ○ お祭りについて知っていることを発表させ、自分たちでお祭りを開いてみたいという意識を高めるようにする。 ○ お祭りの様子について話し合う中で、お祭りにはお祭りを開く人やお客さんがいることに気付かせ、幼児とお祭りを開くことを確認する。 お祭りについて知っていることを進んで書いたり、発表したりしようとするとともに、幼児とお祭りの準備などを進めることに意欲をもつことができる。 【関心・意欲・態度】（発表の様子、振り返りカード）
	1 228	2 幼稚園の友達と仲良くなろう。 1回目の交流活動 ・ 幼稚園の友達と遊ぶのは楽しいね。	○ お祭りを一緒に進めていく幼児とゲームを通して交流する。 ○ 一対一のふれ合いから、グループへの活動に発展できるようにする。
か か わ る	1 928	4 フェスティバルの準備をしよう。 2回目の交流活動 ・ お客さんがわくわくするようなお店にしたいな。 ・ 幼稚園の友達に楽しんでもらうためにはどうしたらいいかな。	○ 店の準備をする際に、幼児に喜んでもらえるように工夫したいという願いや思いをもてるように、言葉掛けをする。 ○ 準備を進める際には、グループの友達と教え合うなど、児童同士のかかわりが深まるようにする。 ○ 店のグループごとに、幼児も入って準備を進められるような環境を整え、児童と幼児とのかかわりが深まるようにする。
楽 し む	3 2028 ～ 2228	6 幼稚園の友達にフェスティバルの招待状を届け、フェスティバルの紹介をしよう。 3回目の交流活動 ・ ○ちゃんにフェスティバルの招待状を渡すのが楽しみだなあ。 ・ 幼稚園の友達のお店も楽しみだね。 ・ さかなつりゲームができるかどうか○ちゃんに試してもらおう。	○ 徒歩で幼稚園まで移動するので、道の歩き方など事前指導をしっかりと行う。 ○ ベアの幼児に招待状を渡し、さらにかかわりが深まるようにする。 自分たちの店のいいところや工夫したところを幼児に分かりやすく紹介することができる。 【思考・表現】（発表・行動観察、振り返りカード）
深 め る	4 2328 ～ 2628	7 フェスティバルを開こう。 4回目の交流活動 ・ 店員のときは大きな声で○君を誘うぞ。	○ フェスティバルの始めに2年生の合唱等の発表を行い、和やかな雰囲気を作るようにする。 ○ 幼児の店にも出かけるように声かけをし、お金や品物の受け渡しを通して、幼児と児童のかかわりが深まるようにする。

図1 単元名「みんなでつくろうフェスティバル」指導計画（全28時間）

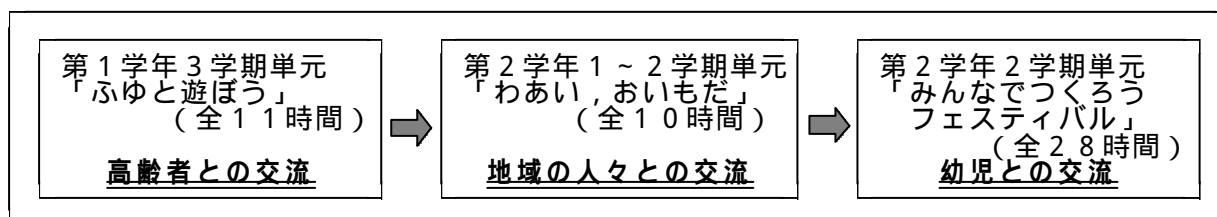


図2 2年間を見通した指導計画

(2) 学習活動の工夫

児童は環境（人や社会，自然）に働き掛けて学び，それらから刺激を受けて学ぶので，児童が幼児とのかかわりにじっくりと取り組めるように，交流活動を4回実施している。これは単に回数を重ねるのではなく，下記のように交流活動の内容やかかわりの深まりを考慮するなどの工夫をしている。

さらに，交流会のないときも幼児とのかかわりへの関心を持続させるために，招待状を作成して幼児に届ける活動を2

回実施している。

このような学習を通して，児童は幼児とかかわることができるようになった自分に気付き，自信をもち，幼児との交流活動の楽しさを実感することができた。

このような授業を展開するためには，幼稚園との事前打ち合わせやフェスティバルで使うおもちゃ等の材料の準備，活動する場の確保など，児童が生き生きと活動に没頭できるような環境を計画的に整えることが前提となる。

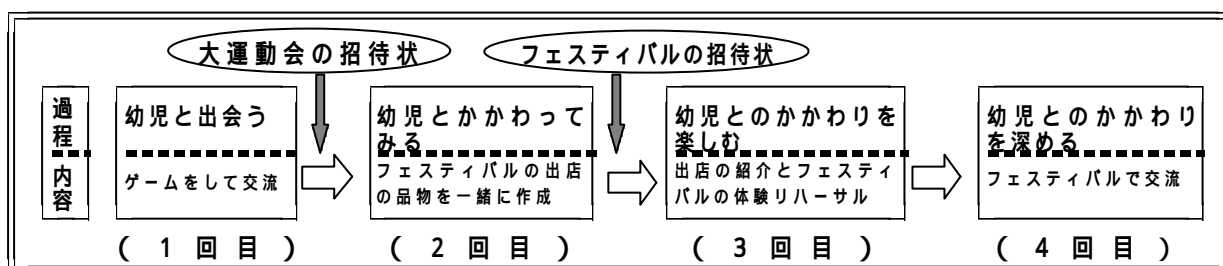


図3 幼児との交流活動

(3) 評価の工夫

児童のよさや可能性を見取り，児童の学びを確実にするために，多様な評価方法を組み合わせ，評価の信頼性・妥当性を高める工夫をすることが必要である。

ア 評価方法の工夫

授業中の児童の姿や児童の振り返りカードなどで評価をするばかりでなく，ビデオテープから見取ったり，幼稚園教諭や他の教諭，保護者からの情報も参考にしたりして，多様な方法で評価を工夫する。

イ 評価の累積

長期的に児童のよさを見取るとともに，評価を累積して，指導及びに指導

計画の改善などに生かす。

4 おわりに

このように具体的な活動や体験を充実し，児童が自分とのかかわりに関心をもちながら，「できた」，「分かった」と実感することができる「分かる授業」を実践することが望まれる。

今後，児童自らが生き生きと活動する生活科の授業が展開され，確かな学力の育成が充実されることを期待したい。

【参考文献】

文部科学省『初等教育資料 No782』平成16年6月号
文部科学省『初等教育資料 No804』平成18年1月号
(教職研修課)

